

人物で語る 日本デンマーク

29 近藤與治右工門 I

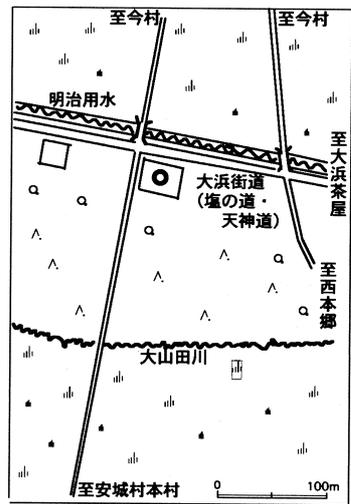
明治二〇年代のこと、碧海の新開地から名古屋の市場へ農作物を出荷する農民が現れた。入植者だった彼の出荷の仕方が、やがて西瓜や梨へ広がったものと思われる。農民の名は、近藤與治右工門である。

與治右工門は、一八四四年（弘化元年）尾張国海東郡萱津村（現海部郡甚目寺町）の與八郎の次男に生まれた。この地は鎌倉時代にはすでに萱津宿の名で知られ、市が立ち、遊女や人形使いがいるにぎやかな街だった。江戸時代からは名古屋の城下へ出荷する蔬菜類の産地となった。與治右工門の家は、もとは武士。名古屋城で切腹を命じられた先祖もいるとか。明治期には、小学校をこの家の土地に建て、毎年運動会に招かれたという大地主であった。

與治右工門は一八才（数え年）で分家した。萱津生まれの彼がなぜ碧海の地に移ったのか、記録はないが、農業を手広く展開する一種の大農経営を目指して、新しい土地を選んだら

しい。彼は一八九一年（明治二十四年）一〇月、四八歳のとき、安城村池浦の土地に三七歳の妻と一六歳の長男、五歳の女の子の四人家族で、ほかに作男級の男（家族）を二〜三人連れて入植して来た。

池浦は、碧海台地のまったただ中、一八八〇年（明治十三年）明治用水ができてから、入植した人たちによって開かれた開拓村だった。一八九一年というのは、新用水開通・入植開始から一〇年が過ぎて、ここでの開墾が成り立つことが分かって来たころであり、與治右工門が移った同じ一八九一年に入ったと伝えられる家が現在も五軒ある。與治右工門が居を構えるのに選んだ地点は特別の地点だった。明治用水沿いの道は、現在の碧南市から東加茂郡足助町へ通じる主要道路で、海岸部の産物が山間地へ、山の産物が海へと運ばれた道で、「大浜街道」あるいは「塩の道」とよばれた。池浦にとつてもうひとつの主要道路は、今村（現東栄町・今本町）と安城村の中心地



1884年の図に近藤家◎を加えて作成

（本村⇨西尾・東尾）とを結ぶ道だった。與治右工門は、この二本の主要道路の交差点を選んだのだ。この交差点には今も石地蔵をまつるが、ちょうど與治右工門が来た前後に東京大相撲の力士だった浜蔵が立てたものである。

與治右工門は、他の入植者と違って、資産を持って入って来ていて、最初から食いつなぐための作物と地主に納めるための米とを作るだけでなく、出荷するユリの根を栽培した。珍しい作物であり高く売れるが、知立・矢作・岡崎の市場では値がつかなかったといい、名古屋の向こうの枇杷島へ持ち込んだ。

収穫物を大八車に積んで池浦を出るのは日没のころ、「夜通し（三河の方言）」東海道を西へ歩くこと三八キロ、夜明け前に市場に着き、明け方のせりに間に合わせた。ユリは多いときは畑に二反歩も作り、収穫と出荷のときには、近くの農家を頼んで仕事を進めた。

與治右工門は、いつも工夫し、新しいことに挑戦する農民だった。尾張地方で評判の「カンウド（寒独活）」を取り寄せて作ったところ、土地が適しているのか、やわらかで口当たりのいい高品質のものができた。こちらは岡崎の市場でも売れた。

與治右工門は、ウドが有利と知ると、ユリ畑をすべてウド畑に変えた。思い切りのいいのが與治右工門だった。

文 天野暢保